

〈シンポジウム 歴史におけるマイノリティ〉

コメント

イスラーム史の視点から

田村 愛理

マイノリティの問題を考える際には、自分自身を解釈に絡め取られて表象されてしまう立場に身を置いてみる体験、あるいは想像力が必要だと思います。すると、やはりその悔しさというのがよく分かるので、こういう仕組みをどうやってずらしていったらいいのかというのが、私個人だけではなく多分歴史学を今なさっている皆さんにも共通の思いではないかと思えます。

まず「マイノリティ」の話ですけれども、議論を実り豊かにするために「マイノリティ」という言葉を定義しておかなければいけないと思います。「マイノリティ」の定義は政治学の方では二つの「P」を使って表します。「Power」と「Population」です。この意味で言えば「Power」も「Population」も少ないのが「マイノリティ」なのはもちろんですけれども、「Population」が多くて「Power」がなければ「マイノリティ」です。ですからオーストラリアのアボリジニも、それからアパルトヘイトで苦しんでいた南アの黒人たちも、南アの場合人口としては「マジョリティ」ですけれども、私の定義では「マイノリティ」に入ります。それか

ら現代、例えば私が行っていたブリテン島（イギリスと使っていないと思うので）では、ウェールズ人だけではなくて、ワーキングクラスの人も現在では「マイノリティ」です。このように語彙を定義して、それからさらにこの「マイノリティ」というのはさきほど福井先生が説明してくださいましたけれども、固定された実態ではなくて、つねに他者との関係性によって決まってくるのだということを最初に押さえておきたいと思えます。

では私の専門のイスラーム地域において、「マイノリティ」とは何なのかということになりますと、「非ムスリムのズインミー（契約の民）」と呼ばれる人たちです。彼らは、具体的にはユダヤ人であったり、アルメニア人であったり、エジプトのコプト教徒（キリスト教徒）であったり、あるいは北インドにおいてはヒンドゥー教徒も「ズインミー」として捉えられていた訳です。では、彼らに「マイノリティ」としての自覚はあったのかということを考えてみますと、これは、自覚はなかったというふうに申し上げたいと思います。私が勉強していたユダヤ人やアルメニア人の「マイノリテ

「イ」の中には官僚になって「Power」を持つ者も多くおり、そういう意味では有名なオスマン帝国の「ナスィー一族」のように非常に権勢を振るった人々がおられますので、彼らは決して「マイノリティ」であったとは言えないと思います。

ではその「マイノリティ」が今日お話しているような立場で「マイノリティ」として自覚され、政治問題となるのは、近代になって国民国家体制下において意識されてきた問題だと思えます。それは主権が「神」ではなく「領域国家」に所属するようになってからです。このシステムは約三百年前、ウエストファリア条約の頃に確立された訳です。日本では、森首相が「日本は神の国だ」というふうな三百年も前に遡るアナクロニスティックなことを言っておりましたが、一応主権が「神」ではなく「領域国家」に所属するというのは、ヨーロッパでは17世紀の半ばに確認されたことです。その意味でまず今日の「マイノリティ」問題ですが、頂いた本シンポジウムのパンフレットの「要旨」に「国民国家の相対化だけではいけない」と書かれてあったと思いますが、一番初めに私達は、まず国民国家を理論的に相対化しておかなければならないと思えます。

そのためにも、今回お話してください。た谷本さんの「商場」、それから小林さんの「蕃地」という、異文化との出合いの「場所」を中心にした今回のシンポジウムはたいへん意義があるものだと考えています。学習院の史学を出た者にとって、学習院でこういうことをやる人がたくさん出てきてシンポジウムが開催できるというのはとても嬉しく思いました。谷本さんの、「場所」を中心に「倭人・アイヌ」関係を再考察する、それから民族集団のアイデンティティ

を保持する枠組としての「蕃地」に注目した小林さん、ともに一方的な従来の「マジョリティ・マイノリティ」関係を壊す枠組を模索する試みとして、たいへん評価できると思います。

けれども、論議を活発にするためにあえて申しますけれども、両者の発表をうかがうと「場所」も「蕃地」も共に次の特徴を持っていると思えます。一つは両方とも「Power」を持つ側が囲い込んだ「場」であるということです。それから二番目にはその中で「マイノリティ」は自由に移動できないということです。すなわちこれらの「場」は「Power」側によって固定化された「場」であって、「マイノリティ」の側からの「場」の組み替えが効かないということが共通点として挙げられると思えます。

両者の「場」の特徴は、前近代の国民国家を相対化する「場」というよりはむしろ、「商場」は「場の設定に関するPowerの介入」という意味で、私は資本主義の萌芽としての「場の囲い込み」というふうに考えられるのではないかと思います。谷本さんは、「倭人集団は直接労働力を人数的にマジョリティであるアイヌに商場の中で依存していたというふうに見ることができると指摘されましたが、これはやはり「搾取していた」とも取れるわけです。谷本さんのような観点から言えば、例えば、「ブリティッシュ・エンパイア」もインド人の労働力に依存し、共存していた、と言うこともできるわけです。もちろん最近ではグローバルゼーションとの関連で「ブリティッシュ・エンパイア」を多文化共存のシステムとして再評価しようという試みも実際にあります。しかし現状においてはグローバルゼーションの本質が多文化の共存ではなくて、アメリカ文化を

中心とした先進国側の二面的経済文化支配の進展ではないかと疑ってみると、このような観点は「Power」を持つ側によって固定された「場」を組み替え得る可能性を提供しないのではないか、そのようなラディカルな視点を提供しないのではないかと危惧いたします。むしろ逆にこうした「Power」を持つ側に囲いこまれた「場」をさらに固定させていく危険性を持つことにならないでしょうか。そういう意味では、小林さんの「蕃地」も日本の植民地政策が民族を保持した、多文化を保持した事を強調するように思われ、大英帝国の植民地政策が多文化共存を可能にしたという見方と同じような解釈を生み出してしまっているのではないかとこの危険性を指摘しておきたいと思えます。

今日における「マイノリティ」の問題を考えると、最も重要なのは国民国家が規定してきたような「場」、今私たちが考えている「領域概念」をいかに組み替えていくのかという問題に収斂すると思えます。常にその時の「Power」にとって都合のよい「場」を固定しようとする状況があるわけですが、そのような固定的視点に取り込まれずに視点をずらしていく工夫が歴史家にとって必要なのではないのでしょうか。自戒を込めて、そのような固定化されない視点を歴史研究、歴史家は提供できるのかということを、私たちはやはりこの席で真剣に議論して問いつづけなければならぬのではないかと思います。